

## 復活に

地煙を上げて押し寄せる風に  
巻き込まれた歌は

<sup>みなも</sup>  
水面に散る

哀しみは<sup>いくとせ</sup>幾年の<sup>のち</sup>後を振り返るか

頭を締めつける雑音に  
ただ歩くのみ

直感が論理に勝利をおさめ  
自由を阻むものはなく  
機械が守るのみ

浮遊する空の上から見えるものは何か  
死が私をわしづかみにする  
その正確無比な手が

時を先取りすることは許されず  
ただ従うことを余儀なくされ  
追従さえ押し返される

諦めを邪魔するおせっかいな復活が  
大声をあげてふれ回るのは  
ああ、美の世界

背負いきれぬ者たちが捨てると叫び  
身軽になることの誇りが  
それが自由と呼ばれ

確かにそれは重すぎたかもしれない  
そも人生がこれほど長くなつては  
駆け抜けることもできまい

木霊のように応える<sup>おの</sup>己が足音に気付き  
ふとこの世の天上の低さに

## 戦慄する

ああ、ただ歩くためだけに  
ただこの廊下を歩くためだけに  
私は生きるだろう  
歩くだろう  
消え行く先へと

(1989.2.4)